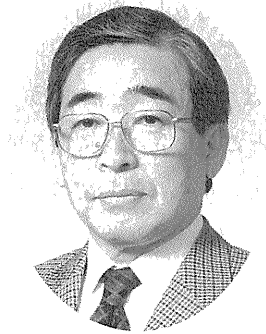


ずいそう



評価の重さ

岸野 佑次

世の中には並み外れた能力の持ち主が存在し、この世を非常に豊かなものとしている。大リーグのイチローはヒットの量産を続け、相手チーム投手には、打たれた悔しさではなく尊敬の念さえ与えている。このような光景、尊敬される側、尊敬する側ともに素晴らしい。私のような素人には打率や盗塁成功率の高さといった上辺の数字を通してしかイチローの技術进行评估することができないが、専門家はそれらの数字を支える様々な身体能力や技術のひとつひとつに対する本質的な評価を行うことができるのであろう。

昨今は評価ばかりで、私の所属する大学でも、ご他聞にもれず学外評価・学内評価が行われる。評価する時間があつたら本業に専念した方がなどと評価の評価をしてしまうのが常であるが、一般に行われる評価は、スポーツの場合と異なり、絶対的な評価がなかなか難しい。しかし、評価を行うということが、個々人に精神的なプレッシャーを与え、自己を律する努力に繋がるとすれば、煩わしさは疎まれてはいけないのであろう。各企業・団体においても、各種ISOの取得に向けた目標の設定とその達成度の評価といった取り組みがいろいろ行われるようになってきた。

人間相互の評価を客観的に行うことには様々な困難が伴うにもかかわらず、何とかこれを行ってきているということは、人間が単なる増殖生物ではないことの証であるのかも知れない。しかし、一口に評価と言っても、それがどれだけ多くの人によって真剣に行われた結果であるかによって、その重みも異なってくる。最近問題なのは、ワイド番組依存の単純思考型評価の多いこと……！。マスコミに乗ればあつという間に多くの人が同じ意見を持った評論家に変身する。マスコミの役割は、評価の仕方を強いるのではなく、評価の多様な判断材料を提供することが本来の役割である筈であるのだが。

評価が難しいのは、芸術の場合も同様である。実は私は指揮者小澤征爾のファンである。きっかけはいくつかあるが、決定的になったのは、1984年、マサチューセッツ州にあるポストン交響楽団夏期演奏会場のタングルウッドでマーラー作曲の交響曲第2番の演奏を聴いたとき

である。声楽ソロと合唱を含む演奏の密度が実に濃く、内面から突き動かされる感銘を受けた。若いころ日本であまり評価されず海外で修行を重ねてマエストロと呼ばれるまでに成長した小澤の人間像はBBCのドキュメンタリー番組でもとりあげられた。たまたまこの番組を見ていて驚いたことに、この番組で中心的に用いられた演奏が、実にタングルウッドに行った日の前後で収録されたと思われる同一プログラム、同一メンバーの演奏であった。

その小澤が今年よりウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任するということが日本に衝撃的ニュースとして伝わり、小澤の指揮した今年のウィーンフィルハーモニー新年演奏会のCDとDVDがクラシックとしては珍しい売り上げを記録した。ウィーン国立歌劇場の音楽監督就任が決まった頃、テレビ出演した小澤にインタビュアーが「やったという気持ちですか？」と質問。実はこの質問の仕方に日本での小澤に対する評価が象徴的に表れている。天才的な才能の持ち主が非常な努力を積み重ねてきたことによる当然の帰結を、宝くじが当たったかのように表現したインタビュアーの失礼の程度は甚だしい。評価の重みはその表現方法に表れる。

ところで、以下に記すことの評価はこれからのことであるが、私は最近、フィンランドの一人の現代作曲家の声楽ソロと合唱付の交響曲の誕生に関わった。私は学生時代、大学の合唱団に所属していた関係で、この合唱団の創立40周年を記念するオリジナル曲の作曲の委嘱のため、海外との連絡を引き受けた。完成時期の遅れなどの曲折はあったが、連絡開始から2年半後の昨年末、作曲家並びにテキストを提起したカナダの環境関連財団の理事が列席する中、仙台で盛大に初演が行われた。演奏終了後、大勢の聴衆からは確かな評価がなされたが、将来この曲がどのように一人歩きするかが楽しみである。

さて、社団法人日本建設機械化協会が担うことが期待される建設技術の中立公正な専門的評価は、効率化やコスト削減を常に求められている公共事業の推進にとって非常に重要な意味をもつと思われる。既に、新工法のデータベース化や建設技術審査証明事業などの取り組みがなされているが、今後とも、新規工事の発注・受注の際に、新しい技術を取り入れるインセンティブとなり得るような技術評価の仕組みや技術登録制度の充実が望まれる。昨今の公共事業に対するマスコミの評価に惑わされない協会独自の専門家集団としてのバックボーンの形成を願って止まない。